

小説を読む——国木田独歩「春の鳥」

コトバ表現研究所 渡辺 知明

① 今より六七年前、私はある地方に英語と数学の教師をしていたことがございます。その町に城山というのがある、大木暗く茂った山で、あまり高くはないが、はなはだ風景に富んでいましたゆえ、私は散歩がてらいつもこの山に登りました。

② 頂上には城あどが残っています。高い石垣に蔦がからみついて、それが真紅に染まっているあんばいなど得も言われぬ趣でした。昔は天主閣の建っていた所が平地になって、いつしか姫小松まばらにいたち、夏草すきまなく茂り、見るからに昔をしのばす哀れなさまとなつています。

私は草を敷いて身を横たえ、数百年斧の入れたことのない鬱たる深林の上を見越しに、近郊の田園を望んで楽しんでたことも幾度であるかわかりませんほどでした。

③ ある日曜の午後と覚えています。時は秋の末で、大空は水のごとく澄んでいながら、野分吹きすさんで城山の林は激しく鳴っていました。私は例のごとく頂上に登って、やや西に傾いた日影の遠村近郊をあかく染めているのを見ながら、持つて来た書物を読んでいますと、突然人の話し声が聞こえましたから石垣の端に出て下を見おろしました。別に怪しい者でなく三人の小娘が枯れ枝を拾っているのです。風が激しいので得物も多いかして、たくさん背中にしよったままおもあたりをあさっている様子です。むつまじげに話しながら、楽しげに歌いながら拾っています、それがいずれも十二三、たぶん何村あたりの農家の子供でしょう。

私はしばらく見おろしていましたが、またもや書物のほうに目を移して、いつか小娘のことは忘れてしまいました。するとキャットという女の声、驚いて下を見ますと、三人の子供は何に恐れられたのか、枯れ木を背負ったままアタフタと逃げ出して、たちまち石垣のかなたにその姿を隠してしまいました。おかしなことと私はその近所を注意して見おろしていると、薄暗い森の奥から下草を分けながら、道もない所をこなたへやって来る者があります。初めは何者とも知れませんが、森を出て石垣の下に現われたところを見ると、十一か十二歳と思わるる男の子です。紺の筒袖を着て白もめんの兵児帯をしめている様子は百姓の子でも町家の者でもなさそうでした。

手に太い棒切れを持つてあたりをきよきよ見回していましたが、フト石垣の上を見上げた時、思わず二人は顔を見合いました。子供はじつと私の顔を見つめていましたが、やがてニヤリと笑いました。その笑いが尋常でないのです。生白い丸顔の、目のぎよりとした様子までが、ただの子供でないかと私はすぐ見て取りました。

④ 「先生、何をしているの？」と私を呼びかけましたので、私もちよつと驚きました。元来私の当時教師を勤めていた町はごく小さな城下です。土地の者は都から来た年若い先生を大概知っているので、今この子供が私を呼びかけたも実は不思議はなかつたのです。そこへ気がつくや、私も声を優しゅうして、

「本を読んでいるのだよ。ここへ来ませんか。」と言うや、子供はイキなり石垣に手をかけて猿のように登りはじめました。高さ五間以上もある壁のような石垣ですから、私は驚いて止めようと思っているうちに、早くも中ほどまで来て、手近の葛に手が届くと、すらすらとこれをたぐつてたちまち私のそばに突っ立ちました。そしてニヤニヤと笑っています。

①「名前は何んというの？」と私は問いました。「六」「六？ 六さんというのかね。」と問いますと、子供はうなずいたまま例の怪しい笑いをもらして、口を少しあげたまま私の顔を気味の悪いほど見つめているのです。

「いくつかね、年は？」と、私が問いますと、げげんな顔をしていますから、いま一度問い返しました。すると妙な口つきをしてくちびるを動かしていましたが、急に両手を開いて指を折って「一、二、三と読んで、十一と飛ばし、顔をあげてまじめに、

「十一だ。」と言う様子は、やと五つぐらいの子の、ようよう数を覚えてたのと少しも変わらないのです。そこで私も思わず「よく知っていますね。」「おつかさんに教わったのだ。」「学校へゆきますか。」「行かない。」「なぜ行かないの？」

②子供は頭をかしげて向こうを見ていますから考えているのだと私は思つて待つていました。すると突然子供はワアワアと唾のような声を出して駆け出しました。「六さん、六さん」と驚いて私が呼び止めますと、

「からす、からす」と叫びながら、あとも振りむかないで天主台を駆けおりて、たちまちその姿を隠してしまいました。

私はそのころ下宿屋住まいでしたが、なにぶん不自由で困りますからいろいろ人に頼んで、ついに田口という人の二階二間を借り、衣食いつさいのことを任すことにしました。

田口というは昔の家老職、城山の下に立派な屋敷を昔のままに構えて有福に暮らしていましたが、この二階を貸し、私を世話してくれたのは少なからぬ好意であつたのです。

③ところで驚いたのは、田口に移つた日の翌日、朝早く起きて散歩に出ようとすると、城山で会つた子供が庭を掃いていたことです。私は、

「六さん、お早う」と声をかけましたが「子供は私の顔を見てニヤリ笑つたまま、草ぼうきで落ち葉を掃き、言葉を出しませんでした。日のたつうちに、この怪しい子供の身の上が次第にわかつて来ました。と言つたのは、畢竟私が氣を付けて見たり聞いたりしたからでし

子供は名を六蔵と呼びまして、田口の主人には甥に当たり、生まれての白痴であつたのです。母親というは四十五六、早く夫に別れまして実家に帰り、二人の子を連れて兄の世話になつていたのであります。六蔵の姉はおしげと呼び、その時十七歳、私の見るところでは、これもまた白痴と言つてよいほど哀れな女でした。

(中略)

④すると田口の主人と話してから二週間もたった後のこと、夜の十時ごろでした、もう床につこうかと思つているところへ、

「先生、お寝みですか」と言いながら私の室にはいつて来たのは六蔵の母親です。背の低い、瘦形の、頭の小さい、中高の顔、いつも齒を染めていた昔ふうの婦人。口を少しあけて人のよさそうな、たわいのない笑いをいつもその目じりと口元に現わしているが、この人の癪でした。

「そろそろ寝ようかと思つてるところです。」と私が言ううち、婦人は火鉢のそばにすわつて、

「先生私は少しお願いがあるのですが。」と云つて言い出しにくい様子。「なんですか。」「六蔵のことです。」と云います。あのようなばかりから、ゆくさきのこと案じられて、それを思う私は自分のばかりを棚に上げて、六蔵のことが気にかかつてならないので云います。「こもつともです。けれどもそうお案じなさるほどのことでもありますまい。」「とツイ私も慰めの文句を言うのはやはり人情でしょう。

① 私はその夜だんだんと母親の言うところを聞きましたが、何よりも感じたのは、親子の情ということでした。前にも言ったとおり、この婦人とてもよほど抜けていることは一見してわかるほどですが、それがわが子の白痴を心配することは、普通の親と少しも変わらないのです。

そして母親もまた白痴に近いだけ、私はますます哀れを催しました。思わず私ももらい泣きをしたくらいでした。

そこで私は六蔵の教育を骨を折ってみる約束をして気の毒な婦人を帰し、その夜はおそくまで、いろいろと工夫を凝らしました。さてその翌日から、散歩ごとに六蔵を伴なうことにして、機に依じていくらかずつ知能の働きを加えることにいたしました。

(中略)

② ある日私は一人で城山に登りました、六蔵を連れてと思いましたが、姿が見えなかつたのです。

冬ながら九州は暖国ゆえ、天気さえよければごく暖かです、空気は澄んでいるし、山登りにはかえって冬がよいのです。

落葉を踏んで頂に達し、例の天主台の下までゆくと、寂々として満山声なきうち、何者か優しい声で歌うのが聞こえます、見ると天主台の石垣の角に、六蔵が馬乗りになつて、両足をふらふら動かしながら、目を遠く放つて俗歌を歌っているのです。

空の色、日の光、古い城あと、そして少年、まるで絵です。少年は天使です。この時私の目には、六蔵が白痴とはどうしても見えませんでした。白痴と天使、なんという哀れな対照でしょう。しかし私はこの時、白痴ながらも少年はやはり自然の子であるかと、つくづく感じました。

③ 今一ツ六蔵の妙な癖を言いますと、この子供は鳥が好きで、鳥さえ見れば目の色をかえて騒ぐことです。けれども何を見ても「からす」と言い、いくら名を教えても覚えません。「もず」を見ても「ひよ

どり」を見ても「からす」と言います。おかしいのは、ある時白さぎを見て「からす」と言つたことで、「さぎ」を「からす」に言い黒めるという俗諺が、この子だけにはあたりまえなのです。

高い木のでっぺんで百舌鳥が鳴いているのを見ると、六蔵は口をあぐりあけて、じつとながめています。そして百舌鳥の飛び立ってゆくあとを茫然と見送るさまは、すこぶる妙で、この子供には空を自由に飛ぶ鳥がよほど不思議らしく思われました。

四

④ さて私もこの哀れな子のためにはずいぶん骨を折りましたが、目に見えるほどの効能は少しもありませんでした。

かれこれするうちに翌年の春になり、六蔵の身の上に不慮の災難が起りました。三月の末でございました、ある日朝から六蔵の姿が見えませんが、屋過ぎになつても帰りません、ついに日暮れになつても帰って来ませんから田口の家では非常に心配し、ことは母親は居ても立つてもいられん様子です。

⑤ そこで私はまず城山を捜すがよからうと、田口の僕を一人連れて、ちようちんの用意をして、心に怪しい痛ましいおもいをいだきながら、いつもの慣れた小道を登つて城あとに達しました。

俗に虫が知らずというような心持ちで天主台の下に来て、「六さん！六さん！」と呼びました。そして私と僕と、申し合はしたように耳をそばだてました。場所が城あとであるだけ、また捜す人が並みの子供でないだけ、なんとも知れない物すまを感じました。

⑥ 天主台の上に出て、石垣の端から下をのぞいて行くうちに、北の最も高い角の真下に六蔵の死骸が落ちていたのを発見しました。怪談でも話すようですが、実際私は六蔵の帰りのあまりおそいと思つてからは、どうもこの高い石垣の上から六蔵の墜落して死んだ

(5)

ように感じたのであります。

あまり空想だと笑われるかも知れませんが、白状しますと、六蔵は鳥のように空をかけ回るつもりで石垣の角から身をおどらしたものと、私には思われるのです。木の枝に来て、六蔵の目の前まで枝から枝へと自在に飛んで見せたら、六蔵はきつと、自分もその枝に飛びつこうとしたに相違ありません。

④ 死骸を葬った翌々日、私はひとり天主台に登りました。そして六蔵のことを思うと、いろいろと人生不思議の思いに堪えなかつたのです。人類と他の動物との相違。人類と自然との関係。生命と死などという問題が、年若い私の心に深い深い哀しみを起こしました。

イギリスの有名な詩人の詩に「童なりけり」というがあります。それは一人の子供が夕べごとにさびしい湖水のほとりに立って、両手の指を組み合わせて、鳥の鳴くまねをすると、湖水の向こうの山の鳥がこれに返事をする、これをその童は楽しみにしていました。ついに死にまして、静かな墓に葬られ、その霊は自然のふところに返つたというところを詠じたものであります。

私はこの詩がすきで常に読んでいましたが、六蔵の死を見て、その生涯を思うと、その白痴を思う時は、この詩よりも六蔵のことはさらに意味あるように私は感じました。

石垣の上に立って見ていると、春の鳥は自在に飛んでいます。その一つは六蔵ではありませんまいか。よし、六蔵でないにせよ、六蔵はその鳥とどれだけちがっていませんらう。

① 哀れな母親は、その子の死を、かえつて子のために幸福だと言いながらも泣いていました。

ある日のことでした、私は六蔵の新しい墓におまいりするつもりで城山の北にある墓地にゆきますと、母親が先に来ていてしきりと墓のまわりをぐるぐる回りながら、何かひとりごとを言っている様子

です。私の近づくのを少しも知らないと見えて、

「なんだってお前は鳥のまねなんぞした、え、なんだって石垣から飛んだの？……だつて先生がそう言ったよ、六さんは空を飛ぶつもりで天主台の上から飛んだのだつて。いくら白痴でも、鳥のまねをする人がありますかね、」と言つて少し考えて「けれどもね、お前は死んだほうがいいよ。死んだほうが幸福だよ……」

② 私に気がつくや、
「おね、先生。六は死んだほうが幸福でございますよ、」と言つて涙をハラハラとこぼしました。

「私、そういう事もありませんが、なにしろ不慮の災難だから、あきらめるよりいたしかたがありませんよ……」
「受けけれど、なぜ鳥のまねなんぞしたのでございませう。」
「それはわたしの想像ですよ。六さんがきつと鳥のまねをして死んだのだから、わかるものじゃありません。」
「だつて先生はそう言ったじゃありませんか。」と母親は目をすえて私の顔を見つめました。

「六さんはたいへん鳥がすきであつたから、そうかも知れないと私が思っただけです。」
「ハイ、六は鳥がすきでしたよ。鳥を見ると自分の両手をこう広げて、こうして」と母親は鳥の羽ばたきのまねをして「こうしてそこらを飛び歩きましたよ。ハイ、そうして、からの鳴くまねがじょうずでした」と目の色を変えて話す様子を見ていて、私は思わず目をふさぎました。

城山の森から一羽のからすが羽をゆるやかに、二声三声鳴きながら飛んで、浜のほうへゆくや、白痴の親は急に話をやめて、茫然と我れをも忘れて見送っていました。

この一羽のからすを、六蔵の母親がなんと見たでしょう。

08.10.22